

大阪モーツァルトアンサンブル

第61回定期演奏会

2015年6月27日（土）午後2時

豊中市立アクア文化ホール

《Programm》

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

Divertimento Nr. 2 D-Dur KV 131 (1772)

ディヴェルティメント 第2番 二長調

- I. *Allegro*
- II. *Adagio*
- III. MENUETTO mit Trio I, Trio II, und Trio III
- IV. *Allegretto*
- V. MENUETTO mit Trio I und Trio II
- VI. *Adagio - Allegro molto - Allegro assai*

Konzert für Horn und Orchester Nr. 1 D-Dur KV 412+514 (386b) (1791/1792)

ホルンと管弦楽のための協奏曲 第1番 二長調

- I. *Allegro*
- II. Rondo: *Allegro* (Ergänzt von Franz Xaver Süßmayr)

…… 休憩 Pause ……

Konzert für Horn und Orchester Nr. 2 Es-Dur KV 417 (1783)

ホルンと管弦楽のための協奏曲 第2番 変ホ長調

- I. *Allegro*
- II. *Andante*
- III. *Rondo: Allegro*

Sinfonie Nr. 18 F-Dur KV 130 (1772)

交響曲 第18番 へ長調

- I. *Allegro*
- II. *Andantino grazioso*
- III. Menuetto mit Trio
- IV. *Molto Allegro*

《Einführung》

小坂 智美 (ホルン独奏)



西宮市出身。

同志社女子大学音楽学科卒業。

同大学音楽学会《頌啓会》特別専修生修了。

サラ・ウィリス氏のマスタークラスを受講。

これまでにホルンを小山亮、小椋順二の両氏に師事、

チェコにて O. ヴラベッツ氏に師事。

現在フリーランス奏者として、室内楽やオーケストラで活動中。

ブラスアンサンブル匠メンバー、西宮音楽協会会員。

大阪モーツァルトアンサンブル

Konzertmeister: 大西 正人

1. Violine: 大屋 美代子 久保 聡一 高橋 淑子 藤井 裕雄

2. Violine: 田邊 明子 小谷 健 濱田 利正 藤井 聡子 満多野 穂高

Bratschen: 能勢 徹 河合 士郎

Violoncelli: 加納 隆 岩田 暢子

Kontrabaß: 大川 宏明

Flöten: 門司 真美 長谷川 淳子

Oboen: 小林 靖之 利谷 久美

Fagotte: 尾家 祥介 服部 真貴子

Hörner: 武本 浩 加藤 仁 中根 慎介 北脇 知己 吉田 徹



1984年、大阪大学大学院生を中心に発足。以後、京阪神の各大学オーケストラOBを結集し、年間4～5回の演奏活動を続けている。指揮者を置かず自発的なアンサンブルの実現を目指す。演奏会では主にモーツァルトの作品を取り上げ、最新の研究成果に基づいて編纂された原典版を使用し、当時の一般的な編成で演奏している。1986年6月に行った特別演奏会では、ヴィーン・フィルのアルフレート・プリンツ氏、アダルベルト・スコッチ氏等と共演し、好評を博した。1986年から1990年にスペトラ・プロティッチ氏と4度共演。1988年5月には、小山亮氏と新モーツァルト全集版によるホルン協奏曲全曲を録音した。1989年から1994年、関西モーツァルト協会例会に7度出演。1991年12月5日、大阪カテドラル聖マリア大聖堂におけるモーツァルト没後200年記念追悼ミサでレクイエムを演奏した。1995年にはザルツブルク大聖堂でミサに出演、モーツァルテウム大ホール、ヴィーン・ミラーテン教会で演奏会を行った。1996年から2000年にかけてモーツァルト劇場例会に5度出演。1993年から亀岡混声合唱団と22回共演。2004年、指揮者なしでのモーツァルト交響曲全曲演奏会を完結した。

《Einführung》

ロイトゲーブとモーツァルト 大阪モーツァルトアンサンブル 武本 浩

イグナーツ・ロイトゲーブ (Ignaz Leutgeb) は、ホルンという楽器がこの世に生れて以来、最も有名なホルン奏者。彼は1732年10月8日にザルツブルクで生まれ、友人のモーツァルトは彼のために4曲のホルン協奏曲を作曲した。晩年、彼はチーズ商としても成功し、裕福に暮らした。1811年2月27日、ウィーンで没した。

このように紹介されることが多いロイトゲーブとはどのような人物だったのであろうか。まず、イグナーツという名前は間違いで、正しくは、ヨーゼフ (Joseph) であった。これは、I. ロイトゲーブのイニシャルを誤ってイグナーツ (Ignaz) と解釈したことに由来する。古いラテン語には、JやUはなく、それぞれIおよびVであった。イエス・キリストのイエス Jesu は Iesv だったのである。今でもヨーロッパの街を歩くとVをUに置き換えると解読できる石碑が至る所にある。ロイトゲーブの名前がヨーゼフであることは、ウィーンのノイラーヒェンフェルト教区教会に残されている彼の出生記録が示している。そこには、「6日、ヨーゼフ、父は、ヴァイオリン奏者のレーオポルト・ロイトゲーブ (Leütgeb)、母ロジーナ、教父は宿屋の主人のヨーゼフ・コーンベルガー」と記載されており、生まれたのはウィーンで1732年10月6日と判明した。父からヴァイオリンの手ほどきを受けたことは容易に想像できる。ロイトゲーブには兄と妹がおり、音楽家だった兄ヨーハンは、1752年1月31日に、妹カターリーナは1760年2月19日に結婚した。妻に先立たれた父は、1789年6月4日、93歳でウィーンの救貧院ランゲンケラーで亡くなった。

カール・ディッタース・フォン・ディッターズドルフによると、ロイトゲーブは1750年代初頭からヒルトブルクハウゼン王子のためにホルンを演奏していた。1761年11月27日から1763年1月28日にかけて彼はブルク劇場で少なくとも14回の公演を行っている。そこで、レーオポルト・ホフマンやカール・ディッタース・フォン・ディッターズドルフのホルン協奏曲が演奏された。舞踏家で年代記編者であったフィリップ・トービアス・グンペンフーバー (1708-1770) によるとロイトゲーブは1762年7月2日にミヒヤエル・ハイドンのホルン協奏曲 (残念ながら現存しない) を演奏したとの記録がある。その翌日、1762年7月3日土曜日に、ロイトゲーブの最初の子どもアンナ・マリア・カターリーナが聖ウルリッヒ教会で洗礼を受けた。その記録によると父の名は、ヨーゼフス・ロイトゲーブ (Josephus Leütgeb)、母バルバラ、教母はアンナ・ハイデニン (Anna Haydenin)、教父はエステルハージ公のカペルマイスター・ヨーゼフとある。交響曲の父フランツ・ヨーゼフ・ハイドン (Haydn) である。ロイトゲーブ夫妻は、当時、聖ウルリッヒ教会の向かいのノイシュティフトガッセに住んでいた。

1762年、ヨーゼフ・ハイドンは、ロイトゲーブのためにホルン協奏曲を作曲した。第1番二長調 Hob. VIIId:3である。自筆譜の最初のページの一番下に Leigeb とロイトゲーブのサインがあり、最初の子どもが生まれたときに、ハイドンからプレゼントされたのではないかと考えられている。なぜ、ロイトゲーブ (Leutgeb) が Leigeb と記入したのかはわからないが、ウィーン大学のミヒヤエル・ローレンツは、当時の一般的な音楽家の教養レベルはそれほど高くなく、単にミススペルだったのではないかと考えている。モーツァルトはロイトゲーブのことをロイトゲーブ (Leutgeb) と呼んだりライトゲーブ (Leitgeb) と呼んだりしていた。この表記の違いは当時としては良くあることだった。

ロイトゲープの最初の妻であったマリア・バルバラ・プラツェリアーノは1732年11月20日に聖ウルリッヒ教会で洗礼を受けた。彼女の父ビアギット・プラツェリアーノは、1686年頃にイタリア・モンテナルスのフリウリ村に生まれた。彼の兄アントーニオは、1724年、ウィーンのリヒテンタールでテレージア・グルと結婚している。それより前に、兄弟はウィーンに来ていた。ビアギット・プラツェリアーノは、ウィーンでサラミやパルメザンチーズを作って生計を立て、1732年2月3日に家主の娘カタリーナ・モレツリと結婚した。ビアギットは、1763年10月16日、肺壞疽でこの世を去った。しばらくの間、未亡人が店を切り盛りしていたが、1764年にヨーハン・ロッターにソーセージ製造権を売ってしまった。ロイトゲープはチーズ商として晩年を裕福に暮らしたと言われているが、彼がウィーンでチーズ商をしていたことを示す納税記録などの資料は存在しないようである。1777年、ロイトゲープ夫妻はペンツィンクの肉屋フェルディナント・アウマンから借金をしてアルトラーヒェンフェルトのプリンデンガッセにある家を買ったが、早くも1778年7月1日には、4%の利息で抵当に入れなければならなくなっていた。1783年、抵当権はヨーゼフ・アウフムートに渡り、ロイトゲープの死後、1812年になって抹消されている。晩年、お金に困ったロイトゲープは、それまで所有していた貴重な自筆譜のコレクションをルドルフ大公に売らなければならなかったことから考えると、裕福に暮らしたのではなさそうである。事実、1811年2月27日に亡くなった時には、1286グルデンもの負債が残った。

1763年2月、ロイトゲープはエステルハージ家に高給で雇われたが、1ヶ月で辞めている。理由は不明である。1763年3月から5月の間にザルツブルクに移住し、ヴァイオリン奏者として宮廷に雇われた。当時の楽団では、管楽器奏者はヴァイオリン奏者を兼ねることが多かった。ロイトゲープも例外ではなかった。そこで、彼はレーオポルト・モーツァルトやヨーゼフ・ハイドンの弟ミハエル・ハイドンと知り合うことになる。ロイトゲープがザルツブルクにやって来た時、1756年1月27日に生まれたモーツァルトは、7歳だった。モーツァルト一家が1763年6月9日から1766年11月29日の間、ドイツ、ベルギー、フランス、イギリス、オランダに旅行した際、1763年8月20日、父レーオポルト・モーツァルトがザルツブルクの家主ローレンツ・ハーゲナウアーに宛てた手紙に、ロイトゲープの名前が初めて登場する。

旅行をはじめから、たしかアウクスブルクだったと思いますが、一度、ヴォルフガングは朝目を覚ましたとき、泣きだしました。私がなぜ泣くのだとききますと、ハーゲナウアーさん、ヴェンツェルさん、シュピッツェーダーさん、ダイブルさん、ライトゲープさん、フォークトさん、カイエターンさん、ナーツェルさんなど、それにほかのお友だちにも会えないのが悲しいの、と言いました。

列記された名前のなかでダイブルさんはフランツ・デ・パウラ・ダイブル（1698?-1783）でヴァイオリン奏者を兼ねていたオーボエ奏者である。フォークトさんは、ヨハン・ゼバスティアン・フォークト（1753-1807）でヴァイオリン奏者。ロイトゲープはモーツァルトの友人と言われているが、この時、ロイトゲープは30歳。友人にしては少々年齢に開きがある。1763年9月14日、息子ヨーハン・アントーンがザルツブルクで誕生した。

1767年9月11日、モーツァルト一家はウィーンに向けて出発する。マリア・テレージアの第9皇女マリア・ヨゼファ・ガブリエーラがナポリ王フェルディナントと婚礼をあげる機会に、王侯貴族の前でヴォルフガングとナンネルルを披露しようと目論んだ2度目のウィーン旅行だった。しかし、ウィーンを襲った天然痘のために、10月15日、当のヨゼファ皇女は亡くなってしまふ。モーツァルト一家はほうほうのいでウィーンを逃げ出すが、ヴォルフガングは、頭は熱く、頬が真っ赤なのに手は氷のように冷たく、うわ言を言うようになった。赤い斑点が出て顔が腫れあがったが、小児散と黒色火薬、松虫草のお茶の服用で痘瘡がはがれ落ち、腫れもおさまって回復した。1767年11月29日、オルミュッツで書かれたレーオポルト・

モーツァルトからハーゲナウアーに宛てた手紙に、ザルツブルクの音楽家たちがヴィーンから逃れるときに見送りに来てくれていたことを伝えている。

ヴィーンを発つ前に「ハイドンさん、ライトゲープさん、それにフランツ・ドラージルさん、それにキュツフェルさんもまた、私どもを訪ねてくれたことを、あなたにお書きしようと思っていました。

ハイドンさんは、ミハエル・ハイドンで、レーオポルトがザルツブルク宮廷楽団副楽長に任じられてから半年後に宮廷音楽家兼コンツェルトマイスターとして迎えられた。フランツ・ドラージルは、ホルン奏者でヴァイオリン奏者。ボヘミア生まれで1746年から1777年までザルツブルク宮廷暦にその名がある。キュツフェルさんはイグナツ・キュツフェルでチェロ奏者である。1769年12月23日、ロイトゲープの娘、マリーア・マグダレーナ・ビクトーリアがザルツブルクで誕生した。洗礼には、ミハエル・ハイドンの妻アンナ・マリーア・マグダレーナ・ハイディン（Hejðin）が教母として立ち会っている。

当時のホルンは、バルブがないナチュラルホルンで、唇の微妙なコントロールと右手によるベル（管の開閉口、朝顔）の開閉で自然倍音以外の音を出していた。右手をベルの中に少し入れてふさぐと暗い音になるとともに音程が下がり、さらに奥に入れて完全にふさぐと鼻が詰まったような金属的な音に変化して音が高くなる。これをストップ音と呼び、この奏法（ゲシュトップフト奏法）を使って半音階を演奏したのである。音色にはむらがあり、速い半音階のパッセージを演奏するには高度な技術を要した。1760年頃、ドレスデンのホルン奏者アントーン・ヨーゼフ・ハンペルがゲシュトップフト奏法を発見したと言われているが、当時の作曲家は音色の変化や他の楽器との不調和を嫌って自然倍音のみを用いることが多かった。しかし、モーツァルトは、1769年、12歳のときに作曲したカッサシオン第3番（セレナード）二長調 KV 100（62+62a）の第2楽章～第4楽章のコンチェルタンテで、初めて独奏ホルンに不自然倍音を使用している。また、1770年12月26日にミラノ宮廷劇場で初演された歌劇「ポント王ミトリダーテ」KV 87（74a）の中で、ミトリダーテの息子シファレが歌うアリア第13番二長調には半音階を伴うオブリガートホルンが登場する。モーツァルトの身近にロイトゲープがいたからこそ、こういった曲が作曲されたのではないかと思う。この推論が合っているとすると、1763年、ザルツブルクにやってきた彼は、1767年はヴィーンに滞在し、1769年の娘の誕生の際はザルツブルクに戻ってきていた。1770年にはモーツァルトと共にミラノに行き、1771年にはヴィーンに行っていることになる。なぜなら、1771年10月28日、ロイトゲープの娘ロジーナがヴィーンの聖ウルリッヒ教会で洗礼を受けた記録が残っているからである。教母はロジーナ・シュタルツァー。彼女は、ロイトゲープのホルンの先生であるトーマス・シュタルツァー（1700-1769）の娘であった。

交響曲 第18番 へ長調 KV 130

1772年5月、これまでにない壮大な交響曲が作曲される。モーツァルト16歳。オーボエの代わりに一貫してフルートが使用され、ホルンは4本使われている。モーツァルトが4本のホルンを使った曲はこの交響曲以外では、1771年作曲の「解放されたベトゥーリア」KV 118（74c）、1772年作曲のディヴェルティメント第2番二長調 KV 131、1772年作曲の交響曲第19番変ホ長調 KV 132、1773年作曲の交響曲第25番ト短調 KV 183（173dB）、1779年作曲の交響曲第32番ト長調 KV 318があげられる。8本のホルンを使った曲もある。1776年12月もしくは1777年1月に作曲された4つの管弦楽のためのノットゥルノ KV 286（269a）二長調である。これらは、ザルツブルク時代の限られた時期に作曲されている。モーツァルトは、これまでの慣例通り、一対のへ調のホルンを使って交響曲第18番へ長調 KV

130第1楽章の作曲を始めた。10段目の五線紙が使われ、1段目は空白で2段目は1対のヘ調のホルン、3段目は第1フルートで4段目が第2フルート、5段目は第1ヴァイオリンで6段目が第2ヴァイオリン、7段目はヴィオラ、8段目は低弦となっており、9段目と10段目は空白で残された。関係調で書かれた第2楽章はこれも通例どおり変ロ調のホルンに変えて作曲し、第3楽章もヘ調のホルンに戻して作曲を始めたが、トリオで新しい試みにチャレンジする。彼はここに一对の高音の八長のホルンを追加したのである。このパートは総譜の一番上に置かれている。そのまま第4楽章では一对の八調のホルンと一对のヘ調のホルンを使って作曲し、第1楽章と第2楽章に戻って、低弦の下に高音の八調（第2楽章はヘ調）のホルンパートを追記した。コーネル大学のザースロウ教授は、このアイデアはロイトゲープがヨーロッパツアーからザルツブルクに戻ってきたことによると指摘している。



交響曲 第18番 ヘ長調 KV 130 第1楽章の自筆譜

ディヴェルティメント 第2番 二長調 KV 131

1772年6月に作曲されたこと以外、どうい目的のために作曲されたのか分かっていないが、ザルツブルク大学のフィナル・ムジーク（最後の音楽）として作曲された可能性が指摘されている。フィナル・ムジークは、専門課程に進む前の2年間、教養課程で理論学（哲学）科と物理学を履修したザルツブルク大学の学生が、8月の同課程の修了試験後、教授たちに感謝するために演奏された。しかし、8月に行われる行事のための音楽が6月に既に完成していること、通常自然倍音しか使わなかったモーツァルトが、この曲には4本のホルンにゲシュトップフト奏法による不自然倍音を多用していることから、4人のホルンの名手が集まった通常とは異なった機会に作曲されたものと考えた方がよさそうである。



ディヴェルティメント 第2番 二長調 KV 131 第1楽章の自筆譜

1772年10月24日、レーオポルトはヴォルフガングを連れてイタリアに旅立った。目的はオペラ・セーリア「ルーチョ・シツラ」の上演である。11月4日、ミラノに到着したモーツァルトは早速作曲に取り掛かる。11月14日、レーオポルトから妻マリー・アンヌに宛てた手紙にロイトゲーブのことが書かれている。

ロイトゲーブさんは、それではローマに行こうと思っているのですか？——当地で何か手始めにやってみないかと、彼に手紙してみましょう。——こういうのはなかなかむずかしいね！——彼が月初め、つまり12月の初めに当地に来られるものなら、オペラでアリアを伴奏してもらうために雇われる望みはあるが、アリアが全部書き上がってしまえば、もう遅すぎます。…（中略）…フランス人のボダス氏が、聞くところでは、自分のフランス製ヴァルトホルンをもって、すぐにも当地にやってまいります。もう充分でしょう！彼が損ずることはありません。ただオペラで使ってもらうには、当地に遅くならないうちに

来なければいけません、つまり、せめて12月1日か2日のうちに駅馬車で発って、すぐ当地に着かなければいけません。12月26日には、もうオペラは舞台にかけられるからです。

モーツァルトは、ロイトゲープのホルン伴奏でアリアを書くつもりであったのであろう。その後、11月28日、1月9日と再三にわたって、ロイトゲープに早く来るよう手紙で催促しているが、彼が来る前にオペラの上演は始まってしまった。1773年1月23日、レーオポルトは、妻マリー・アンヌに宛てた手紙の中で、「ヴォルフガングが残念がっているのは、ロイトゲープがやってくるのが遅すぎたこと、それに自分のオペラをもう聴いてもらえないことです。」と訴え、モーツァルトが姉に宛てたイタリア語の追伸にも「ロイトゲープさんのザルツブルク出発がそんなにも遅れているとは残念です。ぼくのオペラを舞台ではもう観ることもできないし、たぶん途中でなければぼくらと会うこともできないでしょう。」と記している。レーオポルトが妻に「ロイトゲープはまだ当地に着いていません」と書いた2月6日の深夜、やっとロイトゲープがミラノに到着した。2月13日、画家のマルティーン・クノラー宅に無料で住んでいることをレーオポルトは妻に知らせる。

今までに彼は自分の仕事をかなりうまくやって、当地でかなりのお金を儲けるでしょう。彼はびっくりするくらい気に入られて、貴族たちが彼にやらせてあげようとしている音楽会が行われれば、彼はたちまち100ジリアーティを手にするでしょう。大公も彼の演奏を聴きたがっておられます。

2月20日には、リウマチで臥せっているレーオポルトから妻に宛てた手紙で、ロイトゲープの息子フリードリヒ・ヨーゼフが生まれたことを伝えている。

今日のお昼の12時ごろに、ロイトゲープさん（もう何日か彼に会っていませんでした）が、私のベッドの前に、というのは、私は発汗させるためにまだベッドに寝ていたのですが、やって来まして、彼の奥さんが息子さんを産んだという手紙の知らせを私に見せてくれました。その上彼は私にスヴラン・ドール金貨5個を渡して、奥さんに渡してくれといいました。そこでハーゲナウアーさんをお願いして、すぐにこの15ドゥカーテンまたは5スヴラン・ドール、あるいはそれに見合うものをロイトゲープ夫人に渡してもらってください。これは私が着けばお返ししますが、それもそっくりそのままです。

モーツァルト父子はミラノを発って、3月13日にザルツブルクに戻った。しかしザルツブルクにいたのは4か月間のみ。7月14日には、妻と娘をザルツブルクに残してヴィーンへと旅立った。8月12日と8月21日付のレーオポルトから妻に宛てた手紙の中で、ロイトゲープ夫人がヴィーンに滞在していることを伝えている。8月25日付の手紙によると、ロイトゲープはその頃にはザルツブルクに戻っていたようである。8月28日付の手紙にロイトゲープ夫人に貸したお金の話が出てくる。

ロイトゲープ夫人についてはもうなんにも分かりません。私たちが不在のときにやってきたのだったら、フィッシャー夫人が扇を渡しただろうし、もし彼女が引き受けてくれたのだったら、彼女に靴を2足もあげたはずです。ロイトゲープさんには挨拶を送りますが、彼自身そっちにいるのだったら、彼は私のためによければ旅行をしてくれるでしょうが、空飛び機械で旅行してくれるべきです。私がザルツブルクで夫人に貸したお金は、クレムニッツ貨で6ドゥカーテンと5バイエルン・ターラー貨です。その借用証書は、私の箱の中に手を入れてみて、左手の最初の2つの小さな引き出しのひとつに入っています。

9月15日付の手紙でも「ロイトゲープさんは6クレムニッツ貨と5ターラー払ってくれましたか？」と聞いている。次にレーオポルト・モーツァルトの手紙にロイトゲープの名前が出てくるのは1777年である。1777年9月23日、モーツァルトは母とマ

ンハイム・パリ旅行に出発する。12月1日付のレーオポルトからマンハイムの息子に宛てた手紙で、ロイトゲーブはレーオポルトから借金をしてヴィーン郊外の家を買ったことが伝えられる。

ロイトゲーブさんは、現在、ヴィーンのさる郊外市にチーズ販売の権利付きのちょっとしたカタツムリ小屋のようなものを信用で買いましたが、おまえと私宛てに手紙を書いてきました。要するにおまえの出発したあとで、彼は私に、彼がチーズの商いでもっとお金がたまるまでじっといつものように辛抱してもらうのを条件に私に支払うことを約束し、おまえからコンチェルトを1曲ほしがっています。でも今じゃ、もうおまえがザルツブルクにいないって分かったことでしょう。

この家がどうなったかは先に述べたとおりである。ロイトゲーブは、相当お金に困っていたようで、レーオポルトが借金を返してもらったのかどうかは不明である。1781年3月16日、モーツァルトは、主君ザルツブルク大司教ヒエローニムス・コロレードに仕えるためにヴィーンにやってきた。3月24日にザルツブルクに住む父に宛てた手紙に、「ロイトゲーブがよろしくのことです。」と伝えている。後述するようにこの3日前にモーツァルトは最初のホルン協奏曲変ホ長調 KV 370 bを作曲しているが、この曲の存在を1800年の春までロイトゲーブは知らなかった。モーツァルトは、1783年から1787年にかけてロイトゲーブのために4つの協奏曲を作曲している。1782年の作とされるヴァイオリンと2つのヴィオラ、チェロ、ホルンのための五重奏曲 KV 407 (386c)や1787年6月14日に作曲された2つのヴァイオリンとヴィオラ、バスと2つのホルンのための音楽の冗談 KV 522もまたロイトゲーブのために書かれたのではないかと思われる。アントーニオ・サリエーリが楽長を務めるヴィーン宮廷楽団の1782年当時の名簿にロイトゲーブ (Leitgeb) の名前がある。管楽器のためのセレナードを始め、モーツァルトのヴィーンの黄金時代に書かれた数々の名曲はロイトゲーブを念頭に作曲されたことは疑う余地もない。ロイトゲーブは、1785年、妻バルバラが亡くなったので、1786年にフランツィスカ (旧姓フーバー) と再婚した。



2つのヴァイオリンとヴィオラ、バスと2つのホルンのための音楽の冗談 KV 522

1791年、モーツァルト最期の年、モーツァルトがヴィーン近郊のバーデンに湯治に出かけていた妻コンスタンツェに書き送った手紙によると、6月5および6日はロイトゲープの家に泊っている。胸飾りを結んでくれたロイトゲープ夫人に対して、コンスタンツェならこんな風に結んでくれる、と文句を言うところ、単身生活の寂しさが垣間見える。

ロイトゲープ夫人は、きょう、ぼくの胸飾りを結んでくれた。だがなんというザマだ？——ああ！——ぼくはむろん、ずーっと文句を言ってやった。彼女はこんな風に結んでくれてるんだ！——だけどそんなことを言ったってなんにもならない。——きみが食欲があると聞いてうれしい。——でも、たくさん食べる者は、たくさんウン……？——いや、これ以上は言うまい。

その後、たびたびロイトゲープ家を訪問していたモーツァルトは、ロイトゲープからもう一度「魔笛」KV 620の上演に連れて行ってほしいと頼まれ、10月8日に連れて行った。この日は、ロイトゲープの59歳の誕生日の2日後。モーツァルトが亡くなる2か月前のことであった。

ホルンと管弦楽のための協奏曲

1987年に刊行された新モーツァルト全集第5篇第14作品群第5巻によれば、モーツァルトが手掛けたホルン協奏曲は、未完成の3曲を含む次の6曲とされている。

1. Hornkonzert Es-Dur KV 370b+371 (Wien, 21.März 1781)
2. Hornkonzert Es-Dur KV 417 (Wien, 27 Mai 1783)
3. Hornkonzert Es-Dur KV 495 (Wien, 26 Juni 1786)
4. Hornkonzert Es Dur KV 494a (Wien, Sommer 1786)
5. Hornkonzert Es-Dur KV 447 (Wien, 1787)
6. Hornkonzert D-Dur KV 412+514 (386b) (Wien, 1791)

モーツァルトが最初に書いた協奏曲は、第1楽章（KV 370b）とロンド楽章（KV 371）からなるもので、独奏ホルンパートは完成しているが、オーケストレーションは未完に終わった習作である。表紙に1781年3月21日の日付がある。1856年のモーツァルト生誕100年祭の折に彼の長男のカール・トーマス・モーツァルトが、KV 370bのスケッチを1葉ずつ人々に分け与えてしまったので、今なおその約4分の1が未回収になっている。KV 370bの補筆完成は1978年に、ヘルマン・ユーリセンによって行なわれた。KV 371の補筆完成はベルンハルト・パウムガルトナー（1937年）をはじめ様々な人によって行なわれ、コンツェルトロンドとして広く親しまれている。ロイトゲープはこの曲の存在を知らなかったため、新モーツァルト全集の編集者フランツ・ギークリンクはヴィーンホルン奏者ヤーコブ・アイゼン（1756-1796）のために書かれたのではないかと推察している。一方、ヘルマン・ユーリセンは、マンハイムのホルン奏者フランツ・ランク（1751-1816）のために書かれたとしている。未完成に終わったので、単にロイトゲープに見せなかっただけのような気がするが。

ホルンと管弦楽のための協奏曲 第2番 変ホ長調 KV 417

最初に完成された協奏曲はKV 417で、自筆譜の最初のページにはWolfgang Amade Mozart hat sich über den Leitgeb Esel, Ochs, und Narr, erbarmt/zu Wien den 27: May 1783 (ヴォルフガング・アマデ・モーツァルト、ロバ、ウシ、アホのロイトゲープを憐れんで) という献辞が書き込まれている。従来この協奏曲の第1楽章は、Allegro maestosoと指定されていたが、自筆譜に速度表示はない。威厳さよりはむしろロマンティックなものを感じさせる楽章である。終楽章は狩の Rond。中間部のストップ音を多用している難所でロバのホルンをあざ笑ったり、馬は途中でへにやへにやるかと思えば、ぱっかぱっかと駆けて行く、モーツァルト得意の冗談音楽。



ホルンと管弦楽のための協奏曲 第2番 変ホ長調 KV 417 フィナーレの自筆譜

KV 495もロイトゲープに捧げられたことは、モーツァルトが1784年から付け始めた「自作主題目録」からわかる。残念ながら自筆譜が残っているのは、第2楽章の一部と第3楽章の一部のみである。この自筆譜は赤、青、緑、黒の4色のインクを使って書き分けられていて、新全集にカラー印刷されているのでそれらを確認することができる。モーツァルトにとってロイトゲープのために作曲することが余程楽しかったように思える。なお、自筆譜の大半は失われているので、新全集に用いられた二次資料は、1803年ヴィーンで出版された、自筆譜の写譜によるパート譜である。しかしこれは、1802年に出版されたアンドレ版とかなり異なっている。アンドレ版も新全集に収録されているが、第1楽章は短く、テンポ表示はAllegro maestosoではなく、Allegro moderatoになっている。

KV 494aは、第1楽章91小節からなる断章であるが、KV 488のピアノ協奏曲同様、叙情的な作品である。この曲

は、ジョヴァンニ・プントもしくは、ヤーコブ・アイゼンのために書かれたと推察されているが、これも何とも言えない。

KV 447は、6曲のホルン協奏曲中最も美しく充実した内容になっている。モーツァルトが1784年から付け始めた「自作主題目録」にこの曲を入れていないことから、ヨーハン・アントーン・アンドレとルードヴィヒ・リッター・フォン・ケッヘルはこれを1783年の作品と考えていたが、オーケストラの編成がオーボエとホルンではなくクラリネットとファゴットであることから、ジョルジュ・ド・サン・フォアは1787年から1788年以前のはずはないとした。最近ヴォルフガング・プラートにより筆跡鑑定からドン・ジョバンニの年（1787年）と推定されたが、「自作主題目録」に掲載されていないという疑問は未だ解決されていない。ロンドのソロホルンが加わる所で、通常Soloと記載されるところがLeitgebと記載されていることから、この曲もロイトゲーブに捧げられたと考えられている。

ホルンと管弦楽のための協奏曲 第1番 二長調 KV 412+514 (386b)

KV 412+514 (386b)の第1楽章 (KV 412) についても、いつ作曲されたのかわかっていなかった。アンドレとケッヘルは様式から1782年の作と推定したが、プラートは筆跡鑑定により1791年と断定した。ロンド楽章 (KV 514) には、完全なソロパートを持つスケッチと完成稿の「自筆譜」が存在している。ところがこの完成稿にはVienna Venerdì Santo li 6 Aprile 797. (ヴィーン、1797.4.6. 聖金曜日) という書き込みがあり、ケッヘルはモーツァルトのいつもの冗談だと考え (モーツァルトの没年は1791年である)、作曲年を10年前の1787年 (この年の4月6日は聖金曜日である) とした。ところが、この完成稿はプラートの筆跡鑑定により、フランツ・クサヴァー・ジュスマイヤーによるものと判明した。しかも"7"ではなく"2"であり、ジュスマイヤーによる補筆完成は1792年4月6日の聖金曜日ということになった。また、モーツァルトの自筆であることが確認されたスケッチもその筆跡から1791年に書かれたことがわかった。さらに、アラン・タイソンによる使用五線紙の研究により、第1楽章に使われている第1葉から第4葉は「フィガロの結婚」KV 492が書かれた五線紙と同じものであるが、第5葉と第6葉は1791年3月から死ぬまでの間にしか使われなかった五線紙、すなわち、「魔笛」KV 620や「レクイエム」KV 626で使われた五線紙と同じものであることが明らかとなった。ジュスマイヤーが補筆完成した稿の中間部のみに第1楽章の変形が二短調で現れるが、これはジュスマイヤーのオリジナルではなく、モーツァルトのスケッチに記されている。また、このスケッチには、ロイトゲーブに対して演奏上の諸注意がイタリア語でこと細かく記載されている。

まず、独奏ホルンパートにはRONDO: Adagioという驚くべきテンポ表示があり (他の楽器はRONDO: Allegro)、ソロホルンが入るところで、à lei Signor Asino. (ロバ殿へ) Animo -- Presto -- sù via -- da bravo -- Coraggio -- e finisci già? (勢いよくー急いでーそれ行けーいい子だからー元気よくーもう終わる?) à te. -- bestia -- oh che stonatura. -- Ahi! -- ohimè! -- bravo poveretto! (お前にーば〜かーおお、なんて調子はずれーあつ!ーあ〜あ!ー全く衰れなやつ!) Oh, seccata di Cogliioni! (おお、このキ○玉にはうんざり!) 【二回目のテーマが現れるところで】oh Dio che velocità! (おお神よ、なんて速さなんだ!) 【二短調のところモーツァルトにより大きく×印が付けられ削除されている箇所であるが、ジュスマイヤーは補筆の際に利用した】ah che mi fai ridere! -- ajuto! -- respira un poco! (ああ、なんて笑わせてくれるんだ!ー助けて!ーちょっと一息!) 【ソロが6小節休みのところ; この部分はジュスマイヤーが補筆した際、削除してしまった】avanti avanti (前へ、前へ)

questo poi v  al meglio (今度はさっきよりいいぞ)【再現部のところで】e non finisci nemeno? - Ah Porco infame! (最後までやらないの? - ああ、メス豚!)【独奏は最初の4小節のみで、その後は伴奏が旋律を引き継いでいる】oh come sei grazioso! (おお、なんていい感じ!) Carino! -- asinino! - ha ha ha - respira! (かわいらしい! - ロバちゃん! - ハハハ - 息つけ!【フェルマータがある1小節休みのところで】) ma intoni almeno una, Cazzo! (一音くらい調子をあわせろ、このチ○ポ!)【ストップ音が並んでいる演奏困難なところで; この部分もジュスマイヤーは補筆の際に削除した】ahi! -- ohime! -- ha haha! -- bravo -- bravo e viva! (あゝ! - あれまあ! - ハハハ! - ブラボー - ブラボー、万歳) e vieni   seccarmi per la quarta (4回目なのでもうんざり)【4回目のテーマが現れるところで】e Dio sia benedetto, per l'ultima volta (おめでとう、神様のおかげだね。やっと終わりだよ) ah termina, ti prego! -- oh maledetto! -- anche bravura? -- bravo! -- ah trillo da beccore! -- finisci? -- grazia al ciel! -- basta, basta! (ああ、これで終わり、頼むよ! おお、いまいましい!【早いパッセージでストップ音が続く箇所】これも技巧的?【自然倍音のところ】 - ブラボー! - ああ、くちばしのトリル!【トリルのところで】 - 終わる? - 神に感謝! - もう十分、おしまい!)【これも技巧的? : 難しいけどできるかな? というニュアンスか? くちばしのトリル: ホルンは他の楽器と異なりトリルは指ではなく、唇を使ったリップトリルで行なう。beccoreの意味は不明であるが、beccoは嘴、管楽器のマウスピースの意味があるので、トリルを「小鳥のさえずり」と表現しているのかもしれない。】



ホルンと管弦楽のための協奏曲 第1番 二長調 ロンド KV 514 の自筆譜

モーツァルトの死後、コンスタンツェは借金返済のためにジュスマイヤーに「レクイエム」KV 626を完成させた。このホル

ン協奏曲のロンドもジュスマイヤーが完成させているので、ロイトゲーブにも借金があったのかもしれない。しかし、モーツァルトが、お金のためにロイトゲーブに数々の楽曲を書いてきたとは思えないので、ひょっとしたら59歳のお誕生日のお祝いだったのかもしれない。ロイトゲーブは1792年まで現役のホルン奏者であった。

【謝 辞】

イタリア語訳はローマに在住していた中根史佳氏の多大な協力による。この場をお借りして感謝申し上げます。

【参考文献】

1. Michael Lorenz : A Little Leitgeb Research, <http://michaelorenz.blogspot.jp/2013/04/a-little-leitgeb-research.html> (2013).
2. Franz Giegling: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie V: Konzerte, Werkgruppe 14: Konzerte für ein oder mehrere Streich- Blas- und Zupfinstrumente und Orchester, Band 5: Hornkonzerte, Bärenreiter Verlag (1987).
3. Günter Hausswald: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie IV: Orchesterwerke, Werkgruppe 12: Kassationen, Serenaden und Divertimenti für Orchester, Band 2, Bärenreiter Verlag (1961).
4. Wilhelm Fischer: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie IV: Orchesterwerke, Werkgruppe 11: Sinfonien, Band 3, Bärenreiter Verlag (1956).
5. Robert D. Levin, Christian Rudolf Riedel : Wolfgang Amadeus Mozart, Konzert für Horn und Orchester KV 370b + 371, Breitkopf und Härtel (2003).
6. Alan Tyson: Wolfgang Amadeus Mozart, Neue Ausgabe sämtlicher Werke, Serie X: Supplement, Werkgruppe 33: Dokumentation der Autographen Überlieferung, Abteilung 2: Wasserzeichen-Katalog, Bärenreiter Verlag (1992).
7. Neal Zaslaw, William Cowdery : The Compleat Mozart, Norton (1990).
8. Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amadé Mozarts 8. Auflage, Breitkopf & Härtel (1983).
9. H. C. Robbins Landon: Mozart The golden years 1781-1791 with 215 illustrations, 32 in colour and 27 musical examples, Thames and Hudson (1990).
10. H. C. Robbins Landon: 1791 Mozart's Last Year, Thames and Hudson (1989).
11. Neal Zaslaw: Mozart's Symphonies – Context, Performance Practice, Reception, Clarendon Press Oxford (1989).
12. Alan Tyson : Mozart, Studies of the Autograph Scores, Harvard University Press (1987).
13. 石井 明 : モーツァルトとホルンのハンド・ストップ音——モーツァルトによるオーケストラ作品に見られるハンド・ストップ音とそれらが持つ意義——, 慶応義塾大学日吉紀要, 人文科学, No.16, p 29-55, 慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会 (2001).

14. 海老沢 敏, 高橋 英郎 : モーツァルト書簡全集I, 白水社 (1976).
15. 海老沢 敏, 高橋 英郎 : モーツァルト書簡全集II, 白水社 (1980).
16. 海老沢 敏, 高橋 英郎 : モーツァルト書簡全集III, 白水社 (1987).
17. 海老沢 敏, 高橋 英郎 : モーツァルト書簡全集V, 白水社 (1995).
18. 海老沢 敏, 高橋 英郎 : モーツァルト書簡全集VI, 白水社 (2001).

【ご案内】

第26回亀岡混声合唱団定期演奏会

日 時 : 2015年11月29日 (日) 午後2時開演

場 所 : ガレリアかめおか コンベンションホール

指 揮 : 板倉 計夫

合 唱 : 亀岡混声合唱団

管弦楽 : 大阪モーツァルトアンサンブル

曲 目 : W. A. モーツァルト ミサ曲 八長調「戴冠式ミサ」KV 317 ほか

大阪モーツァルトアンサンブル 第62回定期演奏会

～戴冠式のモーツァルト～

日 時 : 2016年1月30日 (土) 午後2時30分開演

場 所 : 豊中市立ローズ文化ホール (阪急庄内駅より北へ500メートル)

独 奏 : 多川 響子 (ピアノ)

独 唱 : 四方 典子 (ソプラノ)、中原 由美子 (アルト)、松原 友 (テノール)、萩原 寛明 (バス)

オルガン : 桑山 彩子

合 唱 : 亀岡混声合唱団

合唱指導 : 板倉 計夫

管弦楽 : 大阪モーツァルトアンサンブル

指 揮 : 武本 浩

曲 目 : W. A. モーツァルト 歌劇「皇帝ティトゥスの慈悲」KV 621より

W. A. モーツァルト ピアノ協奏曲 第26番 二長調「戴冠式」KV 537

W. A. モーツァルト ミサ曲 八長調「戴冠式ミサ」KV 317